2003.5.15『大阪から全国へ！～大阪の障害運動の先駆者～』

全国障害者解放運動連絡会　楠　敏雄さん

ご紹介：楠さんは、２歳の時に結膜炎にかかり、治療のミスもあり、以来５０数年間見えない世界で暮らしてこられました。当時は入学がとても難しかった修士課程に進まれ、英語教師という職を獲得されました。いまは、全障連、全国障害者開放運動連絡会議のトップにおられます。お子さんが３人。奥様は、知的なハンディを負っている方達が、自分の意見を堂々と言いながら暮らす挑戦で有名な「パンジー」のリーダーをされています。

:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:=*:.:*=*:.:*=*:.:

トークから：

日本で戦後、身体障害者福祉法というのを作る過程で主流になったのは傷痍軍人。その傷痍軍人の人達ね、「わし等は、国の為に犠牲になったのだ。生まれつきの障害者などと一緒にしてくれるな」と公言する。障害者同士の間に分断が生じてたんです。それを、官僚もうまいこと使って、できるだけ軽度の人しか支援しない法制度にしてしまった。

１９６０年代になって、親の会の声が高まってきたので施設を作って、その重度の人達は施設へ集めようという、その収容政策をしてきたのね。こういうことで、日本の障害者政策は非常に遅れてきた。しかも当事者団体が、保守系の団体と革新系の団体と、革新系もまた政党によってわかれる。ということで、団結した取り組みができてきていない。これが日本の障害者運動の弱点なんです。

アメリカは共和党、民主党と分かれてますけども、障害者の連盟とはこの枠を越えて必要な時には議員に対するきちんとした影響力を行使する。これが「障害を持つアメリカ人法」、ＡＤＡを作ることができた背景でもありますね。

ところが日本では、お役人が勝手に障害者政策を作る。それを委員会に諮るんだけど当事者はほんの数人、それも、言っちゃ悪いけども随分お年を取られた。しかも、障害者政策とか自立運動とかに関心がない、昔話をよくするような方。厚生省の出した提案に「うん、まあまあ、ええやろ」。もうちょっと「ここをこうせい」（笑い）ぐらいゆうてもいいのに、そうゆう政策のパターンですね。「こういうことで、当事者参加と言えるのか」と、私達はずっと問題にしてきました。

大阪府の場合は３８人の委員のうち１４人が障害者とその家族です。しかも、障害者の政策の委員会の中に当事者部会というのを作って、当事者の立場をきっちり反映させるようにしました。当事者の立場を抜きにして、施設の経営者とか、専門家といわれる学者とか行政の担当者が決めて、障害者に「これでいきますよ」と言って合意を取る、こうゆうやり方は逆転している。障害当事者がまず意見を述べる、それをもとに決めるべきだということ。１９９１年に確立しました。その時にできたのが、「ふれあい大阪障害者計画」。その時に当事者参画をシステムとしてきっちり確立させたんですね。私のようなうるさい障害者が何人も入って、行政にきっちり、これはおかしい。これはこうすべきではないのか。いうことを常に提起するんです。色んな要求をしてます。

しかし、要求型だけでは不充分なんです。要求するとたとえば、１００個要求した。その内、まあ１０個はなんとか考えましょう。しかし、残りの９０個はできません。お金がありません。これでお終いでしょ。そうじゃなしに、あれが大事なんだ。政策として、こうゆう制度を作っていく必要があるんじゃないのか、制度のこの部分をこんなふうに変える必要があるんじゃないのか。ともかく制度を変えていく、見直すんですね。そういう視点で政策参画、当事者参画とを実現させていく。これが、一番の目標だったんですね。

障害者のニーズってのは、地域で自立した生活を送ることなんですね。今までは施設が障害者の生活の場だと。障害者のケアは、家族がとことんして、世話できなくなったら、どっか山奥の施設へ。大阪で言うと金剛コロニーですね。「金剛山のもとに非常に景色のいい」とありますが、ここから約２時間かかるんですね。そこに８００人の障害者が住んでいる。それ自身が不自然なんです。自然はすばらしいけれども、やり方は不自然。そうでしょ。障害者だけが山奥で生活する。バスで４０分も５０分もでないと出て来れない。これ自身が不自然じゃないか。という事で、施設中心の施策から、地域での自立ができる。そっちの方へシフトを変えていく。こういう事をずっと私達は言いつづけています。

そのために障害者用のヘルパー、精神障害者用のヘルパー、色んな新しい制度を作る。ということに着手しています。これは大阪府と一緒になって、私達がＮＰＯ、そういう市民の団体を作って、そこと、行政とを連携して作ろう。金がなくてもやれる事もあるということで作らせて頂いた。

それから、街作り、ね。バリアフリーの街を当事者自身が色々チェックして変えていく。例えば大阪では点字ブロックは８割５分ついてるのね。ところが、不備なんです。例えば、点字ブロックの上を伝っていったら、ちゃんと電柱にぶつかるようにつくってくれているんですね。親切な、障害物競走の練習かと思うんですけどね。とにかく、怖いでしょ。あるブロックはブロックの上を伝っていくと車道のど真ん中に出てしまう。これじゃ何もならない。利用者の立場、利用者の視点で点検していないから、こうゆうことになるんですね。そういう、やっぱり利用者の視点に立った街作りが大事ですね。

それから、教育も今までは養護学校とか、盲学校とか建てて、障害者を行かせておけばよい。そこは、設備も整っているし、教員も多いしということだったけれども、じゃあ地元の学校に通いたい、一緒に勉強したいと思っても、そういう受け入れがない、来てもらっても困るという所さえある。こうゆう所でやっぱり、地域の学校で体勢を整えていく、ノウハウを揃えていく、障害を持った子が一緒に学べる教育を作る。これも今大きな課題になっています。

もう１つは仕事ですね。今までの国の発想ってのが、「障害者が一生懸命訓練して頑張って、能力をつけたら雇ってあげましょう」だった。でも、訓練して、健常者並になれる障害者なんてほんのわずかしかいないんですね。

大事なのは、むしろ、一緒に働けるように支援、システムを作る。ジョブコーチまたはジョブアシスタントというんです。私にもアシスタントがいて、今日も美しい女性がついて来てますけども、この方がいないと、私は、山のように送られてくる書類に何が書かれてるかわからない。ほとんど普通の文字なんですね。他の職員に全部読んでもらう、ってのは、それは、他の職員も仕事があるから困難なんですね。そうすると、いくら私が頑張って、努力したところで、限界がある。知的障害だったら、色んなコーチをしてくれる人ですね。こういうもの、こういう体制を整えない限り障害者雇用は進まない。

まあ、こういうような課題を大阪は、特に全国に先駆けて色々作って、で、取り組んでいます。まだまだ不充分ですけども、そういう視点で大阪を精神的な福祉の街にして、それを全国に波及させていきたいと取り組みをしているところです。

:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:=*:.:*=*:.:*=*:.: